

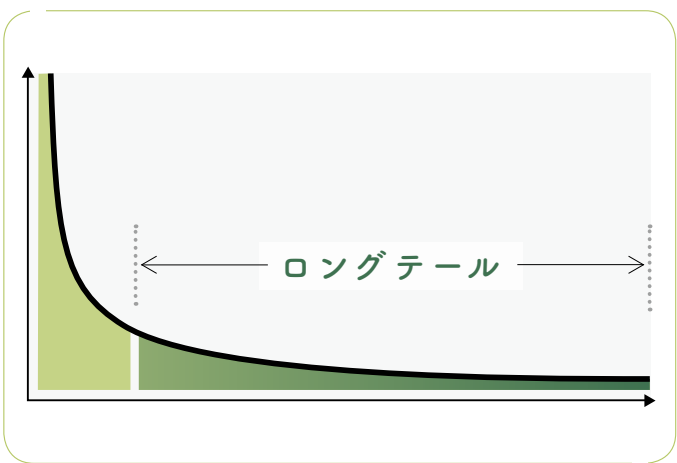
地域を活発にする ロングテールの発想

ロングテールの発見

二〇〇六年にアメリカで出版された『ロングテール』という書籍が世界で話題になった。著者は『ワイアード』という情報社会の先端を紹介する雑誌の編集をしていたC・アンダーソンで、取材の過程で書籍や音楽の販売傾向が急速に変化しているという情報を入手した。従来の商品の販売には、商品全体の二〇%で売上げの八〇%になるという二〇対八〇の経験法則が存在し、しかも利益の一〇〇%は二〇%の商品で獲得していたのである。

ところが取材している過程で、それとは相違する現象に出合った。以前から存在する一〇〇枚のCDを内蔵したジュークボックスでは、人気

がなく演奏されない楽曲が多数あるのに、約一万枚のCDに録音してある楽曲を通信回線経由でハードディスクに収録している最新のデジタル・ジュークボックスでは、九八%の楽曲が最低でも三カ月に一回は再



生されているという、従来とは相違する意外な事実が判明したのである。書籍も同様で、既存の大型書店では売上げの上位一万種の書籍でも半分は三カ月に一冊も購入されないが、通信販売の書店では上位一〇万種の書籍の九八%が三カ月に一冊は購入されていることが判明した。完全に異なる世界である。この傾向を、それぞれの書籍の販売冊数を縦軸、販売冊数の順番を横軸にしたグラフにすると、見事な曲線になる。これは尻尾の長大な恐竜のような形状のため「ロングテール」と名付けられた。

インターネットが実現した ロングテール

このような現象が二一世紀の初頭から登場したのには理由がある。イ

ンターネットによる通信販売の浸透である。通信販売の元祖は一九世紀後半にアメリカで開業した「シアーズ・ローバック」で、大部の凶入りカタログを家庭に配布して電話による注文に対応し、商品を発送して世界最大の小売業者になった。しかし、このビジネス形態は二〇〇〇年に終了した。インターネットで検索して注文することが社会に浸透した影響である。

その原因は、印刷した紙製のカatalogでは掲載する商品の数に限界があるし、希望する商品を発見するのにも手間がかかるからである。この法則は百科事典にも登場した。世界最大の書籍の百科事典『エンサイクロペディア・ブリタニカ』は全三二二巻に約五〇万の項目が掲載されている。一方、インターネット内部に存在する百科事典『ウィキペディア』は英語だけでも六六〇万項目が存在し、目的の項目を発見するのも容易である。

この法則を見抜いて成功したのが「アマゾン・コム」である。アメリ

カでは毎年一〇万種の新刊が発行されるが、アメリカ最大の書店でも店内には既刊も合計して一七万種しか陳列していないし、その規模の書店は全米に三店しかない。そこで実物の書籍を用意しないで、発売されているすべての書籍の題名や著者や値段などの情報のみを収集したデジタル書店を構築し、自由に検索できるようにしたのが「アマゾン・コム」である。

ロングテールが 活発にする地域

現在、日本には法人企業が約一八〇万社存在しているが、従業員数が三〇〇人以上の企業はわずかに〇・九%である一方、四人以下の企業が全体の約六〇%にもなる。この統計数値を、縦軸は書籍の売上げ冊数に相当する従業員数、横軸は従業員数の順番に企業を表示していくと、見事なロングテールになる。中小企業の定義は業種によって相違するが、従業員三〇〇人以下とする

成しているグラフになる。

このロングテールの部分の企業が社会で活躍することが地域にとって重要であるが、そのためには書籍の「アマゾン・コム」、音楽の「スポティファイ」などのように、ロングテールの末尾まで検索かつ注文できるシステムが必要である。現在、地域では観光や催事や名産などコミュニティ・ビジネスと総称される活動を地域の発展の中核にしようと努力しているが、その全体を簡単に検索できるサービスが現状では存在しない。

もちろん全国の名所や催事や名産の統合検索サービスを構築すれば便利であるが、いつも最新情報に更新することは容易ではない。「ウィキペディア」が多数の人々の協働で実現しているように、市区町村や集落単位で発信される情報の統合検索システムがあれば、出張の帰路に見物したり、外国人観光客を地域に吸引したりする仕掛けにもなるし、ロングテール部分の地域が交流人口の増加によって発展する手段にもなる。



東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男

昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究する。とともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組み。